物語展開と，名前の意味

― ヘッセの小説『デーミアン』試論 ―

大久保　進

はじめに

ヘッセの小説『デーミアン(Demian)』の物語展開，および，語り手をふくめた登場人物の意味については，ユング心理学からの解釈が説得力をもって提示されてきています。それに異論を唱える，あるいはそれを修正することが小論の目的ではありません。以下の試みの主眼は，あえて言えばその補足として，この問題に別の観点を持ち込んで物語展開を説明し，そしてこの説明との関連において，物語展開の要所要所に登場する人物たちの意味を，その名前が示すところのものを考えることによって，確認にすることにあります。

Ⅰ　ユング心理学からの説明

ユング心理学からの，あるいはそれによる議論は，〈個性化〉のプロセス論と〈元型〉論によって，『デーミアン』の物語展開と主要な登場人物を解釈するもので，ごく大まかに紹介すると，以下のように説明しています[1]:

この作品は，エーミール・ジンクレーアがその〈自我 (Ich)〉からその〈自己 (Selbst)〉へと到達する自己実現のプロセス，すなわち〈個性化 (Individuation)〉のプロセスを文学的に表現している。この場合，〈個性化〉とは，一面における個人の人格的統合（〈意識 (Bewußtsein)〉と〈無意識 (Unbewußtsein)〉との相互作用，それによる全体性の獲得）と，他面における他の個人および集団からの心理的区分を同時に意味している。〈自我〉とは〈意識〉の中心であり，〈自己〉とは〈意識〉と〈無意識〉とを合わせた全体としての〈こころ (Psyche)〉の中心である。人は〈無意識〉の領域から出現するところのものを意識化することができる度毎に，その分だけ自らの存在を全体的で不可分なものにし，かつ逆に，他の人々や集団の心理状態から区分することになり，このことによって人はその〈自己〉に一層近づくことになる。デーミアンは，ジンクレーアが到達しようと努力する「自分自身」の，すなわち〈自己〉のシンボル的な具現である。

〈個性化〉のプロセスにおいて最初に出会う〈元型 (Archetypus)〉は〈影 (Schatten)〉である。リンゴを盗んだという一寸した嘘を種にジンクレーアを脅し強請る不良少年クローマーは，まさしくそれである。ここで〈元型〉とは，〈集合的 (kollektiv) 無意識〉の領域から生み出される心の働きの人格化されたイメージであり，〈影〉とは〈そうなりたいという願望を抱くことのないもの〉である。この〈影〉をジンクレーアは，〈元型〉として〈導

1)「参考文献」の「5）ユング心理学について」記載の諸文献を参照のこと。

者 (Führer)〉でも〈自己〉でもあるデーミアンの助力によって意識化し，克服するのである（『デーミアン』第1章：二つの世界，第2章：カイン）。
〈個性化〉のプロセスの次の段階に登場する元型は〈アニマ／アニムス (Anima und Animus)〉である。この〈元型〉はそれぞれ，男性の心の中の女性的な面と女性の心の中の男性的な面との人格化されたイメージであり，〈魂の随伴者 (Psychopompos)〉としての役割をももっていて，〈自我〉と〈無意識〉の仲介者として〈個性化〉の媒介者でもある。ギュムナージウムの生徒となったジンクレーアがベアトリーチェと名付けて思慕する若い女性と，デーミアンの母親でジンクレーアが恋慕することになるエーヴァ夫人こそ，それである。彼はベアトリーチェの顔を絵に描いて，それに精神的な礼拝を捧げ，このことによって，自分を振り回す，彼自身の心の中の〈影〉としての思春期の性的関心などの，彼の学校生活・寄宿生活を荒んだものにしている暗いものから解放される（第4章：ベアトリーチェ）。そしてさらにこの絵は，後に彼が写真で目にすることができ，やがて現実に相見えることになる，エーヴァ夫人の顔をすでに予示している。それは，彼自身の「内面の象徴」として彼の「一部」であり，彼に自己実現の道を進み続けることを「要求」しているように，彼には思われる（第7章:エーヴァ夫人）。そしてこのことによって，彼は〈アニマ〉を意識化するのである。
しかし他方で，ベアトリーチェとエーヴァ夫人は，〈太母 (große Mutter)〉であり，〈太母〉として彼を再生させるのである。ここで〈太母〉とは，家族の中の一個人としての母親ではなくして，〈良い母 (gute Mutter)〉あるいは〈生の領域〉と〈悪い母 (böse Mutter) 〉あるいは〈死の領域〉という両面を兼ね合わせた，大地的・霊的イメージの人格化としての〈元型〉である。
ジンクレーアにアブラクサスの神について教える，オルガン奏者で神話研究者のピストーリウスもまた，デーミアンと同様に，〈導者〉としてジンクレーアの前に登場する。しかしジンクレーアはやがて，ピストーリウスがその教えを，すなわち自分自身の認識を生きることができないことを，つまり，ピストーリウスが〈自己〉そのものに至りえないことを自覚して，その許を離れるのである（第5章：鳥は卵から出ようと闘う，第6章：ヤコブの闘い）。
こうして最後にジンクレーアは，〈意識〉からもっとも遠い，そしてもっとも〈集合的〉な元型的シンボルであるデーミアンによって，その自己実現を，すなわち〈自己〉への到達を果たし，その〈個性化〉のプロセスを締めくくるのである（第8章：終りの始まり）。
ちなみに，「卵から出ようと戦う」鳥もまた，〈集合的無意識〉から〈意識〉に出てこようとする生命エネルギーとしての〈リビドー (Libido)〉のシンボルであり，思考の飛翔のそれである。

ヘッセは，『デーミアン』執筆の時期（1917年9月／10月）に，ユングの弟子である分析医ヨーゼフ・ベルンハルト・ラング博士から相当長期にわたって（1916年5月から17年11月）精神療法をうけています。また，ユングその人とも面談する機会をもち，手紙を交換しています。そして，ユングの個人出版の小著『死者への七つの講話 (Septem

sermones ad mortuos)』（1916年）を読んでいます。あるいはまた，1918年には『芸術家と精神分析(Künstler und Psychoanalyse)』という論文を書いて，芸術家にとっての夢見ることと夢の分析の促進的意味を考えています。そして，作者の本名を秘してエーミール・ジンクレーアの名の下に刊行された『デーミアン』を読んだユングは，すぐさま本当の作者を推察していたことを明かす手紙をヘッセに宛てて書いています（Materialien 1., S.155f.）。こうした事実を前提として考えるならば，ユング心理学からする作品説明の上の紹介だけからでも，ヘッセがユング心理学から受け取った一連のもの――〈個性化〉のプロセス論，〈元型〉論，アブラクサスや鳥のモチーフ，再生のモチーフ，そして夢の解釈など――を見事に作品中に消化している，と解することに何の困難もないように思われます。その意味では，作品の結構の説明としては，ユング心理学の観点からするそれで十分であるように見えます。しかし，ヘッセがこの小説の物語展開と登場人物たちの位置づけを考える際に，それが事実重大なヒントあるいはアイデアを与えることになったことを承認した上で，なおかつ，そのことを直接証拠立てる証言はない，と私はあえて言います。状況に異論の余地はないとはいえ，状況証拠という点からすれば，私が提出しようとする別の観点も一考されてよい，と思うのですが，それがそれなりに説得力をもちうるかどうかは，以下の私の論述に懸かっている訳です。

Ⅱ　別の観点

この別の観点とは，ゲーテ晩年の詩群『神と世界(Gott und Welt)』に収められている『始源の言葉　オルペウス風(Urworte. Orphisch)』であり，そこにおいて解き明かされている，人間の誕生時に参与する天上の諸力と，人間の生の行路におけるそれらの力の作用についてのゲーテの考え方です。『デーミアン』執筆に際してヘッセがゲーテのこの詩によったことを，あるいはこれをヒント・手がかりとしたことを直接証言するところのものは，同様にありません。しかし，状況証拠ならいくつか挙げることができます。

まず，第一次世界大戦開戦の2ヶ月後にヘッセが公表した有名な新聞論説『おお友よ，この調べではなく！(O Freunde, nicht diese Töne!)』（1914年11月3日付《新チューリヒ新聞》）です。この中でヘッセは，教養人や知識人の間ににわかに広まった戦意高揚と敵国罵倒の言動に抗議して，「自国民の大いなる解放戦争からあんなにも注目すべき態度で遠ざかっていたあのゲーテの詩よりも，ケルナーの愛国歌謡の方が心中好ましいであろうような人」にたいして，「ゲーテは，1813年に国民歌謡を作詩することはなかったけれども，お粗末な愛国者では断じてなかった…」と弁護していますが，これは，『デーミアン』執筆時期の3年前に当たります。そして，ゲーテの『神と世界』に収められているほとんどすべての詩は，1790年代の終わり頃から1822年頃までに書かれたもので，『始源の言葉　オルペウス風』は1817年に，（後に言及する同じ詩群中の『植物の変態(Die Metamorphose der Pflanzen)』は1798年に，『動物の変態(Die Metamorphose der Tiere)』は多分1798年か99年に，）成立しています。

もう一つは，ヘッセが終生書き続けた新刊書の紹介と批評の文章の中の，例えば1915年

6月27日付の《新チューリヒ新聞》に掲載された『私の書庫のこの一年(Ein Bibliotheksjahr)』です。この文章の中で「私の書庫にこの一年で加わった一番大切なものは，私のゲーテです」と記すヘッセは，彼がそれまで読みかつ使ってきた，少年時代の4巻本作品集以来のいくつものゲーテの作品集やたくさんの単行本に触れた上で，コッタ書店出版の最新の記念版全集40巻プラス索引1巻を，その印刷・装本のすぐれていること，価格の適正さ，そして完備した索引の使いやすさを高く評価して，専門家向けの大部のヴァイマル版と比較しながら，これさえあればゲーテの作品の検索と翻読にまったく不便がなくなる，と賞賛し，注文したこの全集の届くのを待ちわびています。そして，注目すべきことは，その際に，「うち続く戦争のおかげで私は，慰藉と鎮静のこの上なく豊かな泉としてゲーテをますます多く読むことになった」，と述懐していることです。しかし残念なことに，ヘッセが戦争の期間に「慰藉と鎮静」を求めてゲーテの何を読んだのかは，明らかにされていません。

詩人以外のものにはならない，と自ら固く心を決めていたヘッセが，幼少の頃からゲーテの，とりわけて詩作品の熱心な読者だったことはよく知られていることですから，そのこともふくめてまとめて言えば，『デーミアン』執筆の時期にかかわる形で，ヘッセがゲーテの晩年の詩群『神と世界』をあらためて翻読することはなかったとすることの方が，蓋然性の低い考え方だ，と私は思います。そして「慰藉と鎮静」を求めてのゲーテ翻読ということと，この詩群の，例えば『序詩(Proœmion)』(前半は1816年，後半は1812年頃に成立)，『世界の魂(Weltseele)』(1802年頃成立)，『変化のなかの永続(Dauer im Wechsel)』(おそらく1801年成立)，『個と万象(Eins und Alles)』(1821年成立)，『遺言(Vermächtnis)』(1829年成立）などの詩の内容（ここで詳しく立ち入ることはしませんが）とを考え合わせると，読んでいる可能性は一層大きくなる，と私には考えられます。

ところで，ゲーテの詩『始源の言葉　オルペウス風』を構成している五つのスタンザにそれぞれ冠せられているギリシャ語の，合わせて五つの名詞(ΔΑΙΜΩΝ, ΤΥΧΗ, ΕΡΩΣ, ΑΝΑΓΚΗ, ΕΛΠΙΣ）こそ，「神聖な言葉」としての「始源の言葉」の意味するところのものです。そして「オルペウス風」というのは，オルペウス教の説く「神聖な言葉」の伝承と重なり合って，ゲーテにこの詩を書く直接の刺激を与えたゲーオルク・ツォエガ（在野の考古学者にして文献学者）の論文『テュケーとネメシス』(1817年）に引用されている，マクロビウス（5世紀初めのラテン語著作家）の『サトゥルナーリア(I9)』からの一句がオルペウス教の思想圏に属する，と考えられているためです。その一句は，「エジプト人たちによれば，人間の誕生に立ち会う神はダイモーン，テュケー，エロース，アナンケーの四柱である」と述べており，エルピースもまた神の名として原典に登場している，ということです。ゲーテはこの神格を最後に結びつけて，合わせて五つの神格として，各スタンザの小題とした訳です。ゲーテはこの論文を1817年10月6／7日に読んで，7／8日にこの詩を書いたことが，日記から分かっています[2)]。

---

2)「参考文献」の「4）ゲーテについて」記載の „Kommentar“ を参照のこと。

したがって，ユング心理学の〈個性化〉のプロセスが一個人の人格発達のプロセスを説明しているのにたいして，ゲーテのこの詩は本来，一個人の誕生に与る天上の諸力について解き明かすはずのものですが，詩そのものを読むと，この詩は明らかに一個人の人生行路を歌っています。

また，友人の求めに応じてゲーテ自身が書いたこの詩の「注解 (Erläuterung zu „Urworte. Orphisch")」(1820年執筆) では，説明が拡張されて，一個人のレベルをこえて，国民や民族としての人間種族の歴史的展開にまで説き及んでいます。『デーミアン』の最後の2章（「エーヴァ夫人」と「終わりの始まり」）では，世界に散在する「カインの印」をもつ者たちの秘密の教団めいた集まりのことや，戦争によって生まれ変わる・新たに生まれてくる人間種族のことが語られていますから，このこととの関連も忘れないでおく必要がある，と思います。

ところで，上に挙げた五つの神格（ゲーテのドイツ語訳ではそれぞれ，Dämon，Das Zufällige，Liebe，Nötigung，Hoffnung となっています）は人間の誕生に共に立ち会っているのですが，ダイモーンが人の一生を通じて作用する運命の力とされるのにたいして，残りの四つは人生行路の要所要所において介入してきて，それぞれその役割を果たします——テュケーは人間社会における人と人との交わりを促す「偶然」の力として，——エロースは人と人とを特別に結びつける「愛」の力として，——アナンケーは人を自分自身の運命に立ち戻らせる「強制」の力として，——そして，エルピースは人を死に臨んでその生まれの由来へと連れ戻す「希望」の力として。そして，最後のエルピースをのぞいて，残りの三つ（テュケー，エロース，アナンケー）に，人は人生行路で繰り返し出会うことになる，とされています。

ゲーテのこの見方に準じて考えてみると，『デーミアン』の物語展開においては，ダイモーンの運命の力によって導かれる語り手の「私」エーミール・ジンクレーア以外の人物たちは，フランツ・クローマーと，ジンクレーアが進学したギュムナージウムの上級生で同じ寄宿舎の最年長者であるアルフォンス・ベックと，ピストーリウスと，ジンクレーアが自殺の窮地から救い出すことになる下級生のクナウアーとはテュケーの支配圏のうちにあります。また，ベアトリーチェとエーヴァ夫人はエロースの作用を代表しています。さらに，ジンクレーアを一貫して導くマックス・デーミアンはアナンケーの力を体現しています。そして最後に，エーヴァ夫人はもう一度，今度はエルピースの力として，瀕死のジンクレーアの心のうちに安らぎと希望を与える，というように説明することができます。

ところで，人の一生を，あるいは国民や民族の歴史を四季の交代，あるいは四つの時代（黄金の時代，銀の時代，銅の時代，鉄の時代）の交代に託して考えることは，ありふれた発想です。何なら，それを教養小説における生の形成の，あるいは人格の形成の典型的パターンにのせて考えることも，容易いことだと思います。あるいはまた，同じ詩群『神と世界』に収められている，種子から発芽をへて茎と葉を伸ばし，花を咲かせて実を結び，ふたたび種子に戻る，原器官である葉の拡張と収縮のサイクルを歌う『植物の変態』に重ね合わせて考えることもできるでしょう。さらには，『デーミアン』の「はしがき」の最後

のパッセージで個体発生と系統発生のプロセスが比喩的に用いられていることをも参照して言うならば，『始源の言葉　オルペウス風』への「注解」における，種族としての人間集団の歴史を説明する言葉を踏まえて，この展開の中に，同じ詩群中の『動物の変態』の一種進化論的な考え方をも取り込むことができるかもしれません。

つまり，人の一生のプロセスを説明するにはいくつもの可能性があって，ここでは，ユング心理学の提出する〈個性化〉のプロセス論および〈元型〉論による説明と同じ権利をもって，すくなくともそれなりの権利をもって，ゲーテの『始源の言葉　オルペウス風』を提出することができる，と私は言いたいのです。

Ⅲ　名前の意味[3)]

ゲーテの詩において，人間の誕生に立ち会う神々の名前が，「神聖な言葉」として，「始源の言葉」とされているように，ヘッセにおいても，名前は，幼年期の思い出を秘めた秘密の言葉として，そしてその秘密の中へ導く言葉として意識されているように思われます。

ヘッセが1917年に妻のミア夫人（ミアはマリア夫人の愛称で，ギリシャ語で「ただ一人の女性」の意）へのオマージュとして書いたメールヒェン『イーリス(Iris)』の中で，イーリスは，主人公アンゼルムの幼年期の思い出の核をなしている花の名前（アヤメ）であり，同時に，後に彼が深く思慕する女性の名前です。彼女との愛の成就のために，彼女によって，この名前に深く埋め込まれている彼の黄金の幼年期の秘密を想起することを課された彼は，迷誤と苦悩に満ちた旅路の果に，その愛の成就を待たずに死んでしまった彼女を求めて，彼女の声に導かれるように，森の奥深くに立ちはだかる岩壁の，千年に一度しか開かない「精霊の門」に歩み入ります。メールヒェンの最後では，山の内部への入り口であるこの門の奥に続く道の地形に，イーリスの花の姿が再現されます。そして，山の内部深くに彼を誘う細道と，耳もと近く聞こえる，愛するイーリスの懐かしい声が，彼を彼の思い出の秘密の中へと，「故郷」の方へと導くのです。この道行きはカタバシスを連想させますが，しかし道の記述は，物語冒頭のアヤメの花の姿の記述を介して，空の青に架かる五彩の虹をも想起させます。ギリシャ神話は，この天と地を結ぶように見える光学現象をイーリスと名付け，この女神を神々の，そして神々と人間たちの間の使者に任じ，その行き帰りの道筋が虹となるとしていますが，ゲルマン神話も同様に虹に神々と地上を結ぶ架け橋をみています。しかし聖書は，神による助力や救いの保証の徴を，また新たな天と新たな地の新たな契約の証を見ています。いずれにしろ，ここには帰郷や新生や福音という希望のイメージが寄り添っているように，私には思われます。

以下，『デーミアン』の登場人物たちの名前について検討し，私が提出した別の観点からの説明を補強したいと思います。

最初に，語り手である「私」エーミール・ジンクレーアの名前について：
ヘルダーリーンの友人であり後援者であったイーザーク・フォン・ジンクレーアの名前と

---

3)「参考文献」の「6）名前の解明のために」記載の諸文献を参照のこと。

の関連が，エードゥアルト・コロディのヘッセ宛の手紙の中で推測されています (Materialien 1., S.172.) が，後にフーゴ・バルにお墨付きを与えられて (Hugo Ball, S.179.) 以来，この関連づけは自明視されています。しかし私は別の考えをもっています。Sinclair は，ヘルダーリーンの友人の場合と同様に，もともと St. Clair，すなわちスコットランドの聖人クレアの名前に由来し，フランス語の clair は，ドイツ語の klar です。そして，Emil はラテン語の人名 Aemilius に由来し，原義は aemulus で，ドイツ語では der Nacheifernde の意味です。この二つのことに筋道をつけてまとめて言えば，Emil Sinclair の名前は「聖なる明澄を求めて(明澄に倣おうと)努力する人」という意味に読み解くことができます。そして，この名前の意味は，「聖なる明澄」を「自分自身」に書き換えることが許されるならば，作品中の「私」の，自分のダイモーンを見出そうと努力し，自分のダイモーンにしたがって生きようとするその生き方に見事に重なっている，と私は思います。

次に，テュケーの支配領域で「私」が最初に出会う不良少年フランツ・クローマーについて：

Franz は，学校言葉で教科のフランス語を意味しうる語です。俗語では例えば französisch einkaufen (= Ladendiebstahl begehen) とか jm französisch kommen (= dummdreist auftreten) とか sich französisch verabschieden (od. empfehlen) (= heimlich davongehen) というような使い方があり，そこには何か犯罪的なもの・いかがわしいものを想起させるものがあります。他方しかしこの語は，古い時代から家政上の男性の召使い・使用人を言いあらわす呼び名としても使われてきました。Kromer は，中部ドイツ語・上部ドイツ語の Kramer，Krämer と同じく，もともと日用の食品雑貨を商う小商人のことで，比喩的にこせこせ・がつがつした人のことを軽蔑的に指し示してもいます。そうしてみると，Franz Kromer の名前は，「私」の一寸した嘘をネタに「私」を強請り脅す，良家の「私」とは違って下層の貧乏家庭の不良息子に相応しいもの，と言えるでしょう。

次に，アルフォンス・ベックについて：

Alfons は古高ドイツ語にまで遡る語ですが，スペイン語由来の名前です。ドイツ語では der Kampfbereite の意味で，事実，「熊のように強く」，「寄宿舎の先生を思い通りにして」おり，学校でも「沢山の噂話の英雄」であるこの最年長の寄宿生は，いつでも学校や世間の決まりに刃向かう用意ができています。そして Beck は Bäcker と同じで，もとの動詞 backen の本来の意味は wärmen，rösten です。ベック自身もいつも何かに心が焙られているようですが，彼は「私」の心を性的な関心事でパン粉をこねるようにこね回し，パンを焼くように焦がすのです（第４章：ベアトリーチェ)。

そして，ピストーリウスについて：

Pistorius は，ラテン語の名詞 pistor から派生した男性形形容詞で，pistor はもともと粉挽き職人の意味ですが，製パン職人をも言います。やがて修道院の製パン担当の僧の役名として使われて，世俗の製パン職人と区別されることになりました。アルフォンス・ベックと同様に，ピストーリウスもまた「私」の心をこね回し焦がしますが，今度は性的な関心事によってではなく，アブラクサスの神についての説明によってなのですから，一方に Beck

を，他方に Pistorius を配する命名の仕方は当をえている，と考えられます。
なお，粉を挽き，粉を捏ね，形を作り，パンを焼くこの作業に，粘土を捏ねて人の形をつくり，自分の息で生命を吹き込んでアダムを創造した造物主のイメージを重ね合わせることもできるかもしれません。ヘッセ自身が，例えば1934年1月に書かれた『嘆き (Klage)』という詩の第3連で，「神が私たちをどうするおつもりか，私たちは知らない，／神はその掌中の粘土なる私たちを相手に戯れるが，／この粘土は口が利けず形作られるがままで，笑いも泣きもせず，／捏ねられはするけれども，焼かれることはない」と歌っています。つまり，ベックとピストーリウスは，それぞれの仕方で，自分自身への道を求めて苦闘するジンクレーアの自己形成に介入し，これを促したのです。神の掌中の粘土のように捏ねられ形作られるジンクレーアが焼き上がるためには，エロースやアナンケーによるさらなる導きが必要でした。

さらに，下級生クナウアーについて：
Knauer は，中高ドイツ語の knure に由来する語です。俗語では比喩的に Geizhals, Grobian を意味することができるそうですが，上部ドイツ語では Knoten, Knorren と同じで，煩悶に心が結ばれて依怙地になっているこの少年（第6章：ヤコブの闘い）の名前に相応しい，と思います。

今度は，エロースの作用圏で「私」が最初に出会う若い女性ベアトリーチェについて：
偶然に見初めたこの若い女性に，ダンテによってではなく，「イギリスのラファエル前派」の絵によって「私」が一方的に付けた Beatrice という名前は，よく知られているように，ラテン語起源の語で，die Beglückende という意味です。このドイツ語の語根の Glück が，中高ドイツ語で Schicksal(smacht), Zufall を本義とすることを踏まえて，また，「私」が試みに描いた彼女の顔がデーミアンの顔に，そして「私」自身の顔に見えてくることを考え合わせると，テュケーの影響圏にもアナンケーの影響圏にも入るように見えもしますが，しかし彼女は，「私」が荒んだ生活を脱して新しい禁欲的な生活に入るきっかけと動機となる思慕の心を「私」の心のうちに目覚めさせた女性である，という意味で，エロースの作用圏に属している，と言えます。何よりも，彼女のこの絵がまた「私」の「夢の像」として，この時点では「私」がまだ会っていないエーヴァ夫人の顔でもあるということに，その裏書きを見出すことができるでしょう。

そして，エロースの作用圏の中心に位置して，しかし最後にはエルピースとして登場するエーヴァ夫人について：
デーミアンのこの母親を，息子も「私」も，エーヴァ夫人と呼んでいますが，Eva の名前がヘブライ語で die Lebengebende を原義とすることはよく知られていて，とくに付け加えるべきことはありません。「生命を与える者」はまた「生命を奪う者」であって，その意味でエーヴァ夫人のイメージは間違いなく〈太母〉のそれであり，作品中で記述されるアブラクサスのイメージと重なっていくものですが，しかしまた，「生命を与える者」はまた「愛する者」でもあります。
この「生命を与える者」が，ゲーテにおいても「愛する者」の別名でありうることのもっ

とも美しい表現を，『若いヴェールターの悩み (Die Leiden des jungen Werther)』の第一部，1771年5月10日の手紙に見出すことができます。森の小川辺の草地に横たわって，自分をめぐる自然の一切の生命の営みに，ヴェールターは「私たちを自分の姿に似せて創造した全能の神の現前」を見，そして「私たちを永遠の歓喜のうちに漂わせ支え保つ神の愛の息吹」を感じています。やがて時が移って夕暮れになると，一切が凝って，彼の心の中に「一人の恋人の姿」を結ぶのです。そして，この恋人の姿がやがてロッテとなって彼の前に現れます。

ベアトリーチェへの思慕を卒業したジンクレーアもまた，まだ見ぬエーヴァ夫人をすでに運命的に憧れ求めている，と言ってよいと思います。機会があって彼が目にすることのできた，デーミアンの母親を撮った小さな写真——それは「私の夢の像だった，彼女だった。息子に似ていて，ほとんど男のような大きな女の姿。母親らしい表情と厳しい表情と深い熱情を湛えていて，美しく誘惑的で，美しく近づきがたく，デーモンと同時に母，運命と同時に恋人だった。」このイメージは，彼が現実にデーミアン家の玄関の間で彼女に会って，あらためて確認されます。そして，彼にとって，微笑する彼女の「まなざしは成就であり，その挨拶は帰郷を意味していた。… 彼女のそばにいるのは愛の幸福で…あった。… こういう新しい姿で私の運命は現れたのだった。」「私」はこうしてついに「恋人」に出会うのですが，すでにここで，エロースをこえてエルピースとして作用するエーヴァ夫人が予感されています。「私」に性愛的な欲求が欠けている訳ではありませんが，彼女はそれを，「私」に本当に「自分自身」になるための新たな試練を与えることによって，いわば約束しつつ，遠ざけます。そして，作品の最後において，「私」は立哨中に，夜空の「きらめく星々を髪に戴いた，山脈のように大きくて，エーヴァ夫人の表情を浮かべた…力強い女神」の幻の姿に見とれていて，榴弾に当たって重傷を負い，野戦病院に収容されます。そこで「私」は，運命の力によって引き寄せられたように，同じく戦傷を受けて横たわるデーミアンに再会し，そしてデーミアンは，エーヴァ夫人から託されたキスを「私」に届けるのです——「エーヴァ夫人が言っていた，いつか君にひどいことがあったら，彼女が僕に託した彼女からのキスを君にしてあげてくれって …。」言われるままに目を閉じた「私」は，「いくらか血が出ていて一向に止まろうとしない唇の上に，軽いキスを感じた。そしてそれから私は眠り込んだ。」このキスと眠りに「成就」と「帰郷」を，すなわちエロースにしてエルピースとしてのエーヴァ夫人の意味を見ることができる，と私は思います。

最後に，「私」の苦難の時に，まるで神秘の力によってのように現れて，「私」をその本来の道へ連れ戻し，あるいは導くマックス・デーミアンについて：

フーゴー・バルによる指摘 (Hugo Ball, S. 71.) 以来，Demian の名が Dämon との連想のうちにあり，ラテン語の男性形形容詞 daemoniacus「ダイモーン（魔神，悪魔）に取り憑かれた」に由来すると考えられるべきことは，既定のことのようです。事実，ラング博士の治療に際して提出されたと推定されている断篇，いわゆる「夢日記 (Traumtagebuch der Psychoanalyse)」（ヘッセの二番目の妻・ニーノン夫人の手でタイプ・コピーされたこの無表題の原稿は，ヘッセの1917年7月から18年8月にいたる夢の不完全な記録です）の1917

年9月12日の項に，「不気味で危険に見える」デーミアンという名前の男が登場する，一連の「重い，胸苦しい」夢が記されています。そしてこの名前について，ヘッセ自身が「それはダーミアン (Damian) を崩した形であり，音は変わっているけれども，強くデーモン (Dämon) を連想させ，また私にいくらかデミウルゴス (Demiurg) をも想起させる」とコメントしています。まとめて簡単に言ってしまうと，もともとギリシャ語で Dämon は Götterwille を，Damian は der Erzwingende を，そして Demiurg は Werkmeister を意味していますから，作品中のデーミアンのジンクレーアにたいする位置・役割を考え合わせると，ヘッセのこのコメントとこの命名は納得がいきます。

そして，Max は Maximilian の短縮形で，もとの語はラテン語の maximus (der Größte) と aemulus (der Nacheifernde) との合成語です。してみると，マックス・デーミアンとエーミール・ジンクレーアは，aemulus をすでに名前において共有しているのです——同じ「聖なるもの(「自分自身」)を求めて努力する人」として，しかし前者は導き手として，後者はその弟子として。作品の最後において「私」は野戦病院でデーミアンに再会したのですが，彼は翌朝隣のマットレスから運び去られてしまっています。後に残された「私」が治療の床にあって時折「私自身の中に，暗い鏡のうちに運命のさまざまな姿がまどろんでいるところに深く降りていく時，私はただ黒い鏡の上に身を屈めさえすればよいのだ，そうすれば，私自身の姿が，今は全く彼に，私の友であり導き手である彼に等しい自分自身の姿が見えるのである。」マックスの名前に包み込まれていたエーミールが，今は自分の心のうちにデーミアンの姿を宿して，もし戦争に生き残ることができるとするならば（ジンクレーアがデーミアンの跡を追って戦傷死することになるのかどうかは，作品においては判然としていませんが，『デーミアン』の匿名による出版という当初の事情を考えるならば，ジンクレーアがこの作品を書いている訳です)，死んだデーミアンの跡を受けて，彼自身が新しいデーミアンとして新しいジンクレーアの友となり導き手となるだろう，と推測することができます。

作品中の重要モチーフの一つであるアブラクサスの神についても一言：

作品中では，何のコメントもなしに「私」がデーミアンに送りつけた，「私」が夢に見た「卵から出ようと闘う」鳥の姿を描いた絵にたいして，彼からやがて返事がきます——「鳥は卵から出ようと闘う。卵は世界だ。生まれ出ようと欲する者は，一つの世界を破壊しなければならない。鳥は神のもとへと飛ぶ。神の名はアブラクサスという。」作品中でアブラクサスの名前に言及されるのはこれが最初ですが，この後，ピストーリウスを知った「私」は，彼からこの神について教示された訳です。そして，その内容は明らかに，ユングがバシレイデース（紀元130／140年頃にアレクサンドレイアで活躍したグノーシス派のキリスト教教師）の名の下に書き，個人出版して友人たちに贈った小著『死者への七つの講話』に由来しています。ヘッセも，多分ラング博士から借り受けて，これを読んだことが分かっていますが，アブラクサスはこの小冊子で詳しく説明されていますので，この小冊子を，そして，これを下敷きにしていると考えざるをえない，作品中のピストーリウスの説明を参照してください。しかし，アブラクサスについての教説やこの神の名前の数秘

術的意味などについては，何よりも先ず本来のグノーシス研究の成果に譲ります[4]。
しかし，ゲーテとの関連で一つだけ，付言しておきます。アブラクサスは，ユングの小冊子においても，ピストーリウスの教示においても，たんなる善の神，あるいはたんなる悪の神ではなくて，善にして悪の神，光でありかつ闇であり，男性性でありかつ女性性である神と説明されています。デーミアン自身が，アブラクサスへの言及にはるかに先立って，善と悪との二項対立的な捉え方に疑問を提出し，世界は両者を兼ねて一つの全体であるという考え方を，ジンクレーアに説いています（第3章：罪人）。ゲーテにおいても，メフィストーフェレスが自分の領分を「あなた方が罪とか破壊とか，要するに悪，と名付けている一切合財」（『ファウストⅠ (Faust I)』，1342／43行）と説明しながら，「つねに悪を欲して，そしてつねに善を為す，あの力の一部」（1335／36行）と自己紹介していることは，周知のことです（引用した行を含む「書斎」の場のテキストは，『初稿ファウスト』にも『断篇ファウスト』にも欠けていて，いわゆる「契約」の場などとともに，ようやく1797年から1806年の執筆時期に成立しました）。また，若いゲーテは，祝祭演説『シェイクスピアの記念日のために (Zum Shakespeares-Tag)』（1771年執筆）においてすでに，「私たちが悪と名付けるところのものは，善のもう一つの側面にすぎない」と宣言しています。とすれば，ゲーテも宇宙的原理における善悪一如の考え方を共有している，と言うことができるのではないでしょうか。アブラクサスの名こそ出していないゲーテですが，J. G. ズルツァーの『美術』を書評した際（„Die schönen Künste von J. G. Sulzer“，1772年）では，この原理を「自然」と明言し，そこから私たちが看取するのは，「力を呑み込む力」，「美と醜，善と悪」であり，「一切が等しい権利の下に併存している」と説明しています。ちなみに，ゲーテにおいても Abraxas の字は，『西東詩集 (West-östlicher Divan)』の本文と遺文や手紙など，いくつかの箇所に見えますが，グノーシス本来の神の名としてではなく，その像や呪文を刻んだ石として，おおよそ Amulett(stein)，Talisman の意味で用いられているにすぎません。

同様に，「卵から出ようと闘う」鳥のハイタカについても一言：
これも，デーミアンがジンクレーア家の玄関アーチの要石に彫られている古い紋章に深い興味を示して（第2章：カイン）以来，作品中で重く扱われているイメージですが，新しく生まれ出るためには，ハイタカのように殻を破って「卵から出ようと闘」わなければならないのです。つまり，「私」がダイモーンの命ずるところにしたがって，あるいはアナンケーに導かれて本来の「自分自身」になることができるためには，幾度もの自己否定が，すなわち，デーミアンによるクローマーからの解放にともなう，少年時代からの脱却が，ベックによって代表される荒んだ生活からの，ベアトリーチェへの思慕をきっかけとする自己解放が，ピストーリウスからの卒業が，エーヴァ夫人への恋慕の浄化が必要である，

4) 例えばDer neue Pauly. Enzyklopädie der Antike. Hrsg. v. H. Cancik u. H. Schneider. Bd. 1. Verlag J. B. Metzler: Stuttgart/Weimar 1996. S. 31. あるいは Arnold Meyer: Abraxas. In: Materialien 2., S. 40ff. を参照のこと。

ということです。そして，古いヨーロッパが死んで新しい人々によって担われる新しい世界が到来することができるためには，「戦争」が必要である，ということです。ここでは，このイメージがグノーシスの，そしてグノーシスを先取りするオルペウス教の創世神話で語られる世界卵につながっている，とだけ言っておきます。

なお，ハイタカ Sperber は古高ドイツ語の sparwāri < * sparw-aro (= Sperlingsaar) で，やや疑わしいようですが，「好んで雀を補食する鷲」が原義とされています。昼行性の猛禽で，中世には狩猟用の鷹として用いられていました。シンボルとしての鷹や鷲のイメージには古代以来長い歴史がありますが，かなり明確な内容をもっています。鷹が古代エジプトでは太陽と太陽神のシンボルであり，中世ヨーロッパでは，鷹狩りのための厳しい訓練との関連で，宮廷のやかましい処世術のシンボルともなったのにたいして，風に乗って空高く飛び，鋭い眼をもって睥睨する鳥類最大・最強の鷲は，天空の無敵の王者として，一般的に全知全能の神的存在のシンボルであり，聖書では速さ・力・新生のシンボルとしてしばしば引き合いに出され，また，ヨーロッパ中世の動物寓話では復活・再生のシンボルとして登場しています。このこととも，「卵から出ようと闘う」ハイタカのイメージはつながっている，と言ってよいでしょう。

『デーミアン』の登場人物たちの名前の意味を上述のように説明することができるとするならば，この命名の仕方には明らかに整合的な意図があるように見えます。だからと言って，その命名が，例えばトーマス・マンの場合のように，作者の一定の明確な意図に基づいてなされているものと即断することにはまだ問題がある，と私は思います。そこに計画性を想定することができるためには，すくなくとも，『デーミアン』に先行する，そしてそれに続く諸作品についても登場人物の命名の仕方を解き明かし，『デーミアン』の場合が特別な例なのか，それとも通例なのかを検討する必要がある，と考えるからです。

おわりに

私は以上の論述において，小説『デーミアン』の物語展開を，ゲーテの詩『始源の言葉オルペウス風』によって説明し，そして，そこに登場する人物たちの名前を語源的な，あるいは用語上の，あるいは神話上・伝説上の観点から解き明かすことによって，物語展開におけるその意味・役割を確認してきました。そしていわば結論として，登場人物たちの命名に作者の一定の意図を読みとることができるという判断が提出されることになった訳です。しかし正直に言えば，そこにあっさり作者の計画性を見ようとするのでは，面白くない，とも思うのです。そうではなくして，無意識の結果として，すなわち意識されざる意図によってこのことが成り立っていると考えられる方が，文学の出来事として，私にははるかに興味深いことと思われるのですが。

専門家でない者によるこの論述が，牽強附会の譏りを免れて，『デーミアン』研究においてはたしてどの程度有効性をもちうるのか，私自身には正直言って判断しかねます。——専門家からのご批正をえたい，と念じています。

なお，登場人物たちの名前を検討する際に，幸いにして同僚の飯嶋一泰教授のご教示を

えることができました。末筆ながら，ここに記して謝意を表します。そこに間違いがあるとしたら，言うまでもないことですが，それはすべて私の責任です。

（2004年11月）

テキスト

1）ヘルマン・ヘッセの作品については，Hermann Hesse: Sämtliche Werke in 20 Bänden (Band 20, noch nicht erschienen). Herausgegeben von Volker Michels. Suhrkamp Verlag: Frankfurt am Main 2001-2003. を用いました：

„Demian" in Band 3 (Die Romane 2). S. 233-367.

„O Freunde, nicht diese Töne!" in Band 15 (Die politischen Schriften). S. 10ff.

„Ein Bibliotheksjahr" in Band 17 (Die Welt im Buch. Rezensionen und Aufsätze aus den Jahren 1911-1916). S. 457ff.

„Künstler und Psychoanalyse" in Band 14 (Betrachtungen und Berichte 1927-1961). S. 351ff.

„Iris" in Band 9 (Märchen und Legenden). S. 121-136.

„Klage" in Band 10 (Die Gedichte). S. 328f.

[Traumtagebuch der Psychoanalyse 1917/1918] in Band 11 (Autobiographische Schriften 1). S. 444-617

2）ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテの作品については，詩はJohann Wolfgang Goethe: Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. Frankfurter Ausgabe. I. Abteilung: Sämtliche Werke. Band 2. Gedichte 1800-1832. Herausgegeben von Karl Eibl. Deutscher Klassiker Verlag: Frankfurt am Main 1988を，その他は，Goethes Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Herausgegeben von Erich Trunz. C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung (Oscar Beck): München 1981を用いました：

Die Gedichtensammlung „Gott und Welt" in Frankfurter Ausgabe. Band 2. S. 489-512. („Urworte. Orphisch", S. 501f.; „Die Metamorphose der Pflanzen", S. 495ff.; „Die Metamorphose der Tiere", S. 498ff.)

Goethes Erläuterung zu „Urworte. Orphisch" in Hamburger Ausgabe, Band 1 (Gedichte und Epen I). S. 403-408.

„Faust I" in Hamburger Ausgabe, Band 3 (Dramen I). S. 9-145.

„Die Leiden des jungen Werther" in Hamburger Ausgabe, Band 6 (Romane und Novellen I). S. 7-124.

„Zum Shakespeares-Tag" in Hamburger Ausgabe, Band 12 (Kunst und Literatur). S. 224ff.

„*Die schönen Künste* von J. G. Sulzer" in Hamburger Ausgabe, Band 12. S. 15ff.

„West-östlicher Divan" in Hamburger Ausgabe, Band 2. S. 7-125.

参考文献

3）ヘッセについて：

Hugo Ball: Hermann Hesse. Sein Leben und sein Werk. S. Fischer Verlag: Berlin 1927.

Siegfried Unseld: Hermann Hesse. Werk und Wirkungsgeschichte. suhrkamp taschenbuch 1257.

1986.

Joseph Mileck: Hermann Hesse. Dichter, Sucher, Bekenner. Biographie. suhrkamp taschenbuch 1357. 1987.

Rolph Freedmann: Hermann Hesse. Biographie. suhrkamp taschenbuch 3088. 1999.

Materialien zu Hermann Hesses „Demian". Herausgegeben von Volker Michels. 2 Bände (Band 1: Die Entstehungsgeschichte in Selbstzeugnissen und Dokumenten / Band 2: Wirkungsgeschichte). suhrkamp taschenbuch 1947 und 2520. 1993 und 1997. (= Materialien 1 u. 2)

高橋健二：ヘルマン・ヘッセ —危機の詩人—（新潮選書，1974年）

井手賁夫：ヘルマン・ヘッセ研究（第一次大戦終了まで）（三修社，1975年）

B. ツェラー（井原恵治訳）：ヘッセ（ロロロ伝記叢書，理想社，1981年）

4） ゲーテについて：

Kommentar zur Gedichtensammlung „Gott und Welt" in Frankfurter Goethe-Ausgabe, Band 2. S. 1072-1106. (Kommentar zu „Urworte. Orphisch", S. 1092-1098.)

5）ユング心理学について：

Emanuel Maier: Demian. Aus seiner Dissertation: Die Psychologie von C. G. Jung in den Werken Hermann Hesses. New York 1952. (In: Materialien 2. S. 83-112.)

Malte Dahrendorf: Hermann Hesses „Demian" und C. G. Jung. Aus: Germanisch-Romanische Monatshefte, 39. Heidelberg 1958. (In: Materialien 2. S. 129-149.)

Günter Baumann: Hermann Hesses „Demian" im Lichte der Psychologie C. G. Jungs. (Origialbeitrag für: Materialien 2. S. 331-351.)

アンドリュー・サミュエルズ／バーニー・ショーター／フレッド・プラウト（山中康裕監修／濱野清志・重谷茂弘訳）：ユング心理学辞典（創元社，2003年）

A. ヤッフェ編（河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳）：ユング自伝 —思い出・夢・思想—1・2（みすず書房，2002／03年）——『死者への七つの講話』は，『…の語らい』のタイトルで，「2」に「付録V」として収載されています。

小澤幸夫：『デーミアン』——内なる自己への旅（ヘッセ研究会・友の会編・著「ヘッセへの誘い人と作品」所収，毎日新聞社，1999年）

6）名前の解明のために：

Benjamin Hederich: Gründliches mythologisches Lexikon. Wissenschaftliche Buchgesellschaft: Darmstadt 1967. (Reprographischer Nachdruck des Originals aus dem Jahr 1770)

Der kleine Pauly. Lexikon der Antike. 5 Bände. Alfred Druckenmüller Verlag: München 1964-1975.

Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens in 9 Bänden. Herausgegeben von Hanns Bächtold-Stäubli unter Mitwirkung von Eduard Hoffmann-Krayer. Walter de Gruyter: Berlin/New York 1987.

Kluge-Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. Bearbeitet von Elmar Seebold. 23., erweiterte Auflage. Walter de Gruyter: Berlin/New York 1995.

Max Gottschald: Deutsche Namenkunde. Unsere Familiennamen. Fünfte verbesserte Auflage von Rudolf Schützeifel. Walter de Gruyter: Berlin/New York 1982.

Duden-Familiennamen. Herkunft und Bedeutung. Bearbeitet von Rosa und Nölker Kohlheim. Dudenverlag: Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich 2000.

Hans Bahlow: Deutsches Namenlexikon. Familien- und Vornamen nach Ursprung und Sinn erklärt. Gondrom Verlag: Bayreuth 1980.

Heinz Küpper: Illustriertes Lexikon der deutschen Umgangssprache in 8 Bänden. Ernst Klett: Stuttgart 1982-1984.

Goethe-Wörterbuch. Herausgegeben von der Akademie der Wissenschaften der DDR, der Akademie der Wissenschaften in Göttingen und der Heidelberger Akademie der Wissenschaften. Erster Band: A — azurn. Verlag W. Kohlhammer: Stuttgart/Berlin/Köln/Mainz 1978.

アト・ド・フリース（山下圭一郎［主幹］他訳）：イメージ・シンボル事典（大修館書店，1984年）

G．ハインツ＝モーア（野村太郎・小林頼子監訳）：西洋シンボル事典（八坂書房，1997年）

イヴ・ボンヌフォア編（金光仁三郎［主幹］他訳）：世界神話大事典（大修館書店，2001年）

ボ・ライケ／レオンハルト・ロスト（旧約・新約聖書大事典編集委員会編訳）：旧約・新約聖書大事典（教文館，1989年）

梅田修：ヨーロッパ人名語源事典（大修館書店，2001年）

7）オルペウス教とグノーシスについて：

Artikel „Orpheus“ in: Paulys Real-Encyclopädie der classischen Altertumswissenschaft. Neue Bearbeitung. Herausgegeben von Wilhelm Kroll. 35. Halbband: Olympia bis Orpheus. J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung: Stuttgart 1939.

Gnosis und Gnostizismus. Herausgegeben von Kurt Rudolph. Wissenschaftliche Buchgesellschaft: Darmstadt 1973. (Wege der Forschung. Bd. CCLXII)

ミルチャ・エリアーデ（島田裕巳訳）：世界宗教史3　ゴータマ・ブッダからキリスト教の興隆まで（上）（ちくま学芸文庫，2000年）

レナル・ソレル（脇本由佳訳）：オルフェウス教（文庫クセジュ863：白水社，2003年）

ハンス・ヨナス（秋山さと子・入江良平訳）：グノーシスの宗教　異邦の神の福音とキリスト教の端緒（人文書院，1986年）

筒井賢治：グノーシス　古代キリスト教の〈異端思想〉（講談社選書メチエ313，2004年）

Das Geschehen und die Bedeutung der Namen

—— Ein Versuch zu Hesses Roman „Demian“ ——

OKUBO Susumu

Untersuchungen zu Hesses „Demian“, die sich auf Theoreme der Jungschen Psychologie stützen, haben die Entfaltung des Romangeschehens mit der Lehre vom „Individuationsprozess“ und die Figuren mit dem Konzept des „Archetypus“ erklärt und interpretiert, was vieles für sich hat. Hesse war damals in psychotherapeutischer

Behandlung bei Dr. J. B. Lang, einem Schüler von Jung, mit dem er selbst bekannt war und dessen kleine, unter einem Pseudonym erschienene Schrift „Septem sermones ad mortuos" er gelesen hat. Auch war er damals nicht nur mit der Lehre der „Individuation" und der „Archetypen" vertraut geworden, sondern auch mit Jungs Deutung des Abraxas als eines Wesens, das Gott und Teufel, das Gute und das Böse zugleich sei, ferner mit dem Symbol des Vogels, der sich aus dem Ei kämpfen will, sowie mit der Traumdeutung des Freud-Schülers.

Einen anderen Weg zur Tiefenschicht des Werkes scheint mir eine Dichtung des alten Goethe zu weisen: „Urworte. Orphisch". Dieser Zyklus gilt den Gottheiten, die dem Menschen bei der Geburt beistehen. Die ersten vier heißen ΔΑΙΜΩΝ (Dämon), ΤΥΧΗ (Das Zufällige), ΕΡΩΣ (Liebe) und ΑΝΑΓΚΗ (Nötigung). Die letzte und höchste ist ΕΛΠΙΣ (Hoffnung). Der Erzähler Emil Sinclair sucht sein Leben lang nach seinem „Dämon" als dem ihm zugewiesenen Schicksal, und er wird dabei, ohne es zu wissen, von dem „Dämon" in sich geführt. Der Gassenjunge Kromer und Alfons Beck, der „Älteste" in der Pension von Sinclairs Gymnasium, sowie der Organist und Mythenforscher Pistorius sind es, die Sinclair im Guten wie im Schlechten bei seiner Suche nach dem Sinn des Lebens fördern; sie stehen alle drei unter dem Zeichen des „Zufälligen". Im Wirkungskreis der „Liebe" begegnet Sinclair zunächst einer jungen Frau, die er Beatrice nennt und in einseitiger Liebe anbetet, und dann Frau Eva, die Mutter Demians, Sinclairs schicksalhafte Liebe, zugleich Symbol seiner selbst und, wie sich am Ende des Romans zeigt, die bleibende „Hoffnung" in seinem Inneren. Demian, auch er ein „Dämon", ist es, der Sinclair, wenn es diesem schlecht ergeht, auf dessen Weg wahrer Selbstverwirklichung zurücklenkt. Nach Demians Tod sieht Sinclair, wenn er in sein Selbst hinabsteigt, sein wahres eigenes Bild, das nun ganz und gar Demian gleicht.

Diese Interpretation wirft ein neues Licht auf die Namengebung der Romanfiguren. Z. B. bedeutet *Emil*, der Vorname des Erzählers, der von dem lateinischen Personennamen *Aemilius* abgeleitet ist, was seinerseits von *aemulus* herkommt: *der Nacheifernde.* Der Familienname *Sinclair* ist möglicherweise nach dem Namen eines schottischen Heiligen gebildet: *St. Clair* (*frz. clair* = *klar*). Man könnte demnach die Bedeutung beider Namen des Erzählers wiedergeben als: *einer, der nach heiliger Klarheit, d. h. nach Selbstverwirklichung strebt.* Ein anderes Beispiel: Der Name *Demian* ist bekanntlich von *lat. daemoniacus* abgeleitet und bedeutet: *der Dämonisierte.* Sein Vorname *Max*, die Kurzform von *Maximilian*, setzt sich aus *lat. maximus* (*der Größte*) und *aemulus* zusammen, schließt also denselben Sinn in sich wie *Emil.* Das scheint mir ein verschlüsselter Hinweis darauf zu sein, daß sich beide in ihrer Suche nach „sich selbst" eins sind, Demian als Geleiter und Sinclair als der Lernende.

Kurz gesagt: In diesem Roman scheint eine Analogie zu bestehen zwischen dem symbolischen Gehalt des Geschehens und der Bedeutung der Personennamen.